

# ジオパークと地域活性化

1160438 祖川 圭祐

高知工科大学マネジメント学部

## 1 本研究の課題

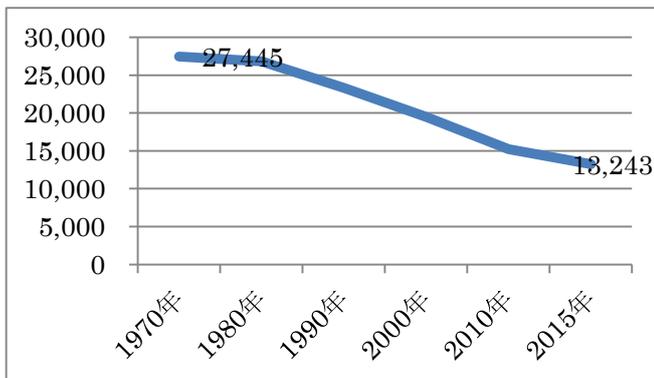
総務省統計局 国勢調査の数値を基に作成

現在日本では、人口が減少する中で、過疎化、高齢化が急速に進み、それにより地域が疲弊傾向にある。筆者が生まれ育った高知県室戸市もその一つだ。室戸市は、1959年に5つの町村が合併し発足した。比較的新しい市であるにもかかわらず、基幹産業である水産業の衰退、人口流出による過疎化が進行し、深刻な問題となっている。人口は高知県11市で最も少なく、北海道を除くと、最も人口の少ない市である。(2015年現在)合併時は3万人を超える人口だったが、今では半数以下になり、消滅可能性都市とまでささやかれるようになった。

本研究では、室戸市の地域活性化を目指し、その実現に向けて必要な取り組みを考えた。地域を活性化させるには、その地域の特性を生かした取り組みが必要である。そこで、2015年9月に世界ジオパークネットワーク(GGN)への加盟再認定された室戸ジオパークを活用することで、室戸市の持続的発展に繋げる術を模索する。

まず、ジオパークがどのようなものなのかを整理する。その上で、室戸ジオパークが室戸市の観光資源としてどのように機能しているのかを考える。その結果から分かる現状と課題を参考に、室戸市の地域活性化を図るために必要な取り組みを考え、持続的発展に向けた解決策を提案する。

図1 室戸市の人口推移 (2015年11月現在)



## 2 ジオパークとその動向<sup>1</sup>

### 2-1 ジオパークとは

ジオパーク (geopark) は、「地球活動の遺産を主な見所とする自然の中の公園」「ジオ (地球) に親しみ、ジオを学ぶ旅、ジオツーリズムを楽しむ場所」などと表現される。これまでジオパーク事業は、ユネスコの支援を受ける形になっていた<sup>2</sup>。

ユネスコはジオパークが備えるべき要素として、以下の6つを挙げている。

- ① **規模と環境**：地域の地史や地質現象がよくわかる大地の遺産を多数含むだけでなく、考古学的・生態学的もしくは文化的な価値のあるサイトも含む、明瞭に境界を定められた地域である。単に地学的に重要なサイトを集めただけではジオパークとは見なされない。
- ② **運営および地域との関わり**：公的機関・地域社会・民間団体・研究教育機関などで構成されるしっかりした運営組織・施設と運営・財政計画を持つ。
- ③ **経済開発**：ジオツーリズムなどを通じて、地域の持続可能な社会・経済発展を育成する。  
※ジオツーリズムとは、観光を通してその地域の特徴を学習すること。
- ④ **教育**：博物館、自然散策路、ガイド付きツアー、各種媒体などにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動を行う。
- ⑤ **保護・保存**：それぞれの地域の伝統と法に基づき大地の遺産を確実に保護する。したがって、基本的には鉱物や化石標本の販売などを行ってはならない。
- ⑥ **グローバル・ネットワーク**：GGNの一員として、相互に情報交換を行い、会議に参加し、ネットワークを積極

的に活性化させる。

## 2-2 ジオパーク認定を受けるには

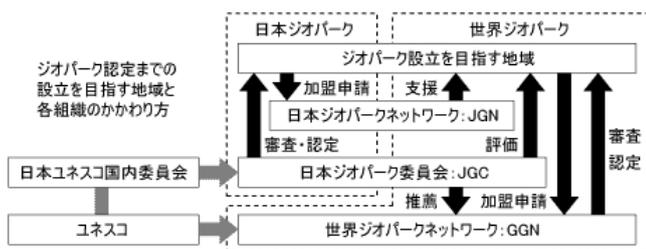
ジオパークには、各国内向けのもの（日本では「日本ジオパーク」）と、世界的に価値が認められた「世界ジオパーク」の2種類が存在する。いずれにせよ、ジオパークと正式に名乗るには、許可を得る必要がある。

まず、日本ジオパークネットワーク（JGN）に、日本ジオパークを目指す地域であることを表明し、準会員として登録される（ここまでは敷居は低い）。並行して「ジオ」に関する保全・研究・教育・普及活動やジオツアーを行っているという実績を積む。正会員への審査への主な応募条件は、優れた地球遺産（地形・地質など）を持つこと、ジオパークを運営する組織・体制が確立済みであることである。それらが認められて初めてJGNの正会員となり、「日本ジオパーク」を名乗ることができる。

「世界ジオパーク」になるためには、GGNへの加盟が認められなければならない。GGNへの加盟申請は、各国毎年2件しかできないことになっており、日本ジオパーク委員会（JGC）の審査に合格して初めてその「申請候補」になることができる。審査を受ける主な条件は、すでにJGN正会員として加盟していること、「ジオ」に関する保全・研究・教育・普及活動と、ジオツーリズムを通じた地域活性化に十分な実績があること、などである。書類審査と現地審査により、日本ジオパーク委員会から推薦されたジオパークを、GGNが審査する。

2015年9月現在、39地域の日本ジオパークがJGCによって認定されている。日本で世界ジオパークに認定されている地域は、洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島、山陰海岸、室戸、隠岐、阿蘇、アポイ岳の8地域である。世界にはこの8地域を含め、33カ国120地域にもなる。

図2 ジオパーク認定を受けるまでのフロー



出所 茨城大学地質情報活用プロジェクト「ジオパークとは」

なお、この認定フローは2015年までの体制である。2015年11月にパリで行われた総会において、ユネスコの支援事業として行われていたGGNの活動は、「国際地質科学ジオパーク計画（IGGP）」として、ユネスコの正式事業になることが公式に発表されている。2016年からはユネスコが認定を担当するとのことである。これにより、ジオパーク活動の一層の発展と、この活動を通じてユネスコの目的である世界平和の実現に寄与することが期待されている<sup>3</sup>。

## 2-3 世界遺産との違い

ジオパークは、世界遺産の自然遺産と混同されることがある。世界遺産はユネスコが認定するもので、条約に基づくユネスコのプログラムである。目的は保護であり、結果的に観光に結びつくことはあるが経済活動は主目的ではない。これに対し、世界ジオパークは、ユネスコの支援で設立されたGGN事務局が認定する。ジオパークの目的は保護だけでなく大地の遺産を活用した経済活動に大きなウェイトがある。保護のためには近づきすぎないような場所は、ジオパークにはならない。

経済活動を重視するGGNは加盟を目指す地域に対し、持続可能な運営システムを要求している。4年に1度の再審査があり、これをパスできなければ世界ジオパークの認定を取り消される。したがって、ジオパークと世界遺産の本質的な違いは、世界遺産が、遺産という「モノ」を対象に認定しているのに対し、ジオパークはそこで行われている「活動」を対象にしていることであるといえる。

世界遺産とジオパークの本質的な違いは、上に記した通りだが、GGNの活動はユネスコが担当することになるため、ジオパークの受け皿は世界遺産と同じになる。したがって、ジオパークの更なる認知度の向上、ユネスコの価値を備えたジオパークの誕生など、ジオパーク活動の促進につながるものがいくつも起こると考えられる。

## 2-4 ジオパークの成り立ち

1992年 ジオパーク構想によって地質遺産や地質学的な多様性を保護・保全することが、国連環境開発会議（リオデジャネイロ）で採択された。

2001年6月 ユネスコ執行委員会の決定を受けて、ユネスコは地質学的に特別意義のある地域や、自然の中の公園を展

開するための努力を加盟国に対して支援することとなった。この時点からジオパーク構想が具体化に向けて動き始めた。

2004年 10年以上の準備活動を経て、GGNがユネスコの支援を受け誕生した。

2004年4月 第1回GGN国際会議が中国の雲台山で開催された。この時点から世界各地のジオパークが具体的に動き始めた。日本での本格的な取り組みも同時期に始まっている。

2008年 国内の認定機関として産業技術総合研究所地質調査総合センターにより、JGCが設立された。

2009年 JGCが2008年に認定した地域により、JGNが結成。

2015年11月 フランスのユネスコ本部で開催されている第38回ユネスコ総会において、これまで、ユネスコの支援事業として行われてきたGGNの活動が、「国際地質科学ジオパーク計画 (IGGP)」として、ユネスコの正式事業になることが決定した。

### 3 室戸ジオパークの取り組みと現状<sup>4</sup>

#### 3-1 室戸ジオパークとは

室戸市の沖、約140kmの太平洋の海底では、海のプレートであるフィリピン海プレートが、陸のプレートであるユーラシアプレートの下に沈み込んでいる。この部分を南海トラフと言い、これが原因で100~150年に一度という周期で地震(南海地震)が起きている。室戸市は、南海地震が起きるたびに大地が盛り上がり続けており、その証拠をいくつも観察することができる。これは世界的にも珍しいとされている。また室戸市の人々は、隆起し続ける大地の上で、自然と共存した暮らしをしてきた。キラ坊スイカや西山きんときなどの農作物を栽培している西山台地は、約13万年前の波打ちぎわが隆起したものである。室戸ジオパークは、プレートが動いていること、それによって今もなお大地が隆起し続けていること、そしてその自然環境の中で人々が独自の暮らしを営んでいることを学べる場所である。現在、室戸市全域の22のジオサイトで構成されており、それぞれにパンフレット(日本語版、英語版)が用意されている。中には、ガイドからの案内や、体験プログラムのあるサイトも存在する。年中無休でガイド活動は行われており、事前予約制ながら当日の飛び込み依頼にも柔軟に対応している。

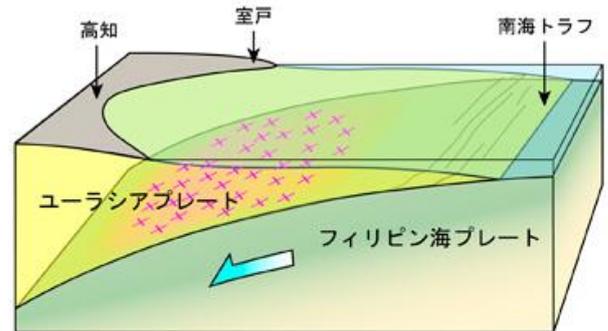
※ジオサイトとは、ジオパーク内の見どころのことで、地質や文化・歴史を感じることができるもののこと。

図3 室戸ジオパークの位置



出所 日本ジオパークネットワークホームページ

図4 高知県沖におけるプレートの沈み込み(×の部分で地震が発生し、その度に室戸市が押し上げられる)



出所 岡村土研 「どうして地震が起こるのか」

#### 3-2 室戸ジオパークの活動

室戸ジオパークは、2008年6月に室戸ジオパーク推進協議会が設立され、その活動を本格化した。平成20年12月8日に日本ジオパーク認定を受けたものの、世界ジオパークネットワークへの加盟は、活動当初、スムーズな取り組みが十分にできていなかったため、2008年、2009年と2年連続で見送られた。しかし、2度の見送りを経験したことにより、室戸市や高知県をはじめとした行政サイドのみならず、地域住民の主体的な動きが加速し、2011年9月に初めて世界ジオパークネットワーク加盟を果たした。その後も、活動は様々な分野で広がりを見せており、高知県内では、室戸といえどジオパークといわれるほど、対外的にも認知度の高い地域づくりとして成長している。

2015年4月には、ジオパークセンターがオープンし、観光客に室戸ジオパークをより深く知ってもらおう取り組みが始ま

っている。また同年9月には、世界認定を受けて以来初めてとなる再審査があったが、4年間の活動を高く評価され、見事再認定となった。

### 3-3 室戸ジオパークの現状

日本ジオパーク認定、世界ジオパーク認定を通して、ジオパークは室戸市の地域活性化に大きく貢献している。室戸ジオパーク推進協議会の現況報告書によると、以下の変化が起きていることが分かった。

#### 3-3-1 経済活動

##### ・室戸ジオパークのロゴ使用

室戸ジオパークロゴは、海洋深層水や農産物のみならず、室戸出身者の集まり「関西室戸会」の名刺、交通安全の広報啓発活動のチラシ・ポスターなどにも使用されている。なお、室戸ジオパークロゴを使用した商品販売数の合計は67898個となっており、総売上金額は1,960万3,840円となっている。  
(2013年現在)

##### ・室戸市観光ガイドの会における経済的活動

室戸ジオパーク推進協議会の収益の一部はガイドさんへの報酬として支払われている。ガイドの会イベントでは、カフェオンザロックの開催、地元産のサツマイモを加工した干し芋の商品化など、収益確保に向けて新しい動きがある。

##### ・飲食店や宿泊施設など商業施設における効果

ジオパーク活動が本格化し、利用客が増えたという声が多数確認されている。

・イオン株式会社によるご当地w a o nカードの売り上げの一部寄与

##### ・地元企業による協賛事業

・民間企業によるレストラン「ジオパーク夢路灯」の新規開店(2014年8月)

##### ・ジオパークセンターの開設<sup>5</sup>

ジオパークについて、来訪者や室戸の観光スポットなどの問い合わせに対応するインフォメーションセンターや室戸ジオパークビジターセンターの機能を集約した施設が、2015年4月にオープンした。オープンからわずか4ヶ月で入館者数が5万人を超えるなど、現在では室戸ジオパークの拠点施設として十分に活躍している。大型スクリーンを備え、臨場感あふれる体感が可能な「ジオシアターゾーン」をはじめ、グッズ販売や各種体験プログラムの案内も行うインフォメーション

ョンカウンターを備えた「ジオガイダンスゾーン」、人と大地をつなぐジオストーリーを紹介した「大地との共生ゾーン」、「大地と歴史文化ゾーン」、「大地のいとなみゾーン」など、室戸世界ジオパークの魅力を伝える展示が数多く存在する<sup>6</sup>。

#### 3-3-2 住民・民間企業の活動

##### ・ジオパークに対する地域住民の前向きな姿勢

世界認定前は、「室戸岬の岩に税金を投入するのはおかしい」「研究者の娯楽には付き合えない」といった批判的な声が地域住民サイドに多くあった。しかし、世界ジオパーク認定、日本ジオパーク全国大会の開催を通して徐々に批判的な言説は少なくなっており、前向きな動きが見受けられる。その事例として、2010年度から協議会が販売している室戸ジオパークポロシャツ(1,800円)が、2013年度末までに総売り上げ数約5000枚に達している。

現在では、室戸市内の銀行、郵便局、スーパーの夏の制服に起用されるなど、日常的に着用する人が見受けられるようになっていっている。また地域住民からは、新色を求める声も多く、毎年新色の販売をしている。

#### 3-3-3 ジオパークに関連する動き

・室戸市役所では、消防車や路線バスのバス停に室戸ジオパークのロゴを入れるなど、ジオパークを活用した動きが広がっている。

・高知県東部地域全体の活性化に室戸ジオパークが活用される動きも出てきている。2015年4月から開催された高知県東部地域博覧会「高知家まるごと東部博」のサブタイトルは、「遊・食・体・感。ジオ紀行」となっており、高知県東部地域全体をジオパーク的な見せ方で伝えていこうという動きがある。

・東部博を契機に、室戸ジオパークを舞台にトライアスロンを開催しようという動きもあり、それが2015年5月に初めて実現した。これは、東部博の補助金を活用しながら、室戸市商工会が中心となって、行政や他の民間団体と協力して新たな大会を立ち上げたものである。2016年5月には第二回の開催も決定しており、この動きは、行政主導による動きが主であった室戸市において、これまでにない新しい取り組みであり、新たな地域活性化の動きとして今後の展開が期待される。

##### ・地域住民の中での室戸岬という場所の価値の変化

室戸市の住民にとって、室戸岬が特別な価値のある場所と

して認知されるようになってきている。「ジオパークになってから室戸岬に行くようになった」「室戸岬は何もない場所だと思っていたが、観光旅行に行くような意識になった」という声が聞かれるようになったそうだ。室戸市内のある常会(町内会)が室戸岬サイトに見学に来る事例も見受けられるなど、地域住民の室戸岬に対する価値、意識が大きく変化した。

・地域住民の一人一人に光が当たるようになった

これまでの室戸市では、さまざまな地域住民一人一人の個性が前面に出る地域づくりの実践事例が少なかった。ジオパーク活動が本格化する中で、それぞれの地域住民が持っている個性に光が当たるようになった。例えば、婦人会の皆さんは得意の料理でジオパーク関連イベントに協力している。郷土史家の方は、ジオパークガイドという新たな形で自分の知識を観光客に伝えている。室戸高校の「観光甲子園」本選出場では、生徒がマスコミに取材され、室戸市の後方の表紙に写真が掲載されるなど、その存在が大々的に報道され、生徒の自信につながっている。

(注3)「3-2 室戸ジオパークの活動」「3-3 室戸ジオパークの現状」は、室戸ジオパーク推進協議会『現況報告書』10～13ページを参照している。

#### 4 室戸ジオパークの効果

上記でも述べたように、室戸ジオパークが室戸市にもたらす経済効果は大きなものである。以下のグラフは、平成16年度から平成25年度の室戸市への観光入込客数の推移である。

室戸市が世界認定を受けたのは平成23年度だが、このグラフを見ると平成21年度から飛躍的に観光客が増加したのが見て取れる。その要因には、おそらく平成21年度～平成22年度にかけて放送された「龍馬伝」が大きく関係している。放送以前の高知県の観光客数は、平均310万人前後だったが、放送後は435万人まで急増しており、その波及が室戸市にも及んだと考えられる。

このように、大河ドラマによる効果は、短期的な成果が見られる。しかし、放送翌年は、バブルの反動で例年よりも観光客数が落ち込む現象が起こる。実際に、放送翌年の平成23年度は、高知県の観光客数が435万人から388万人まで減少している。対して室戸市は、46万人から49万人に増加して

いる。数字で見れば約3万人の差だが、実際にはより大きな差があることが考えられる。続く平成24年度、平成25年度も観光客数は増加傾向にあり、室戸ジオパークがもたらす効果をしっかりと確認することができた。

図5 高知県観光入込客数(千人)の推移

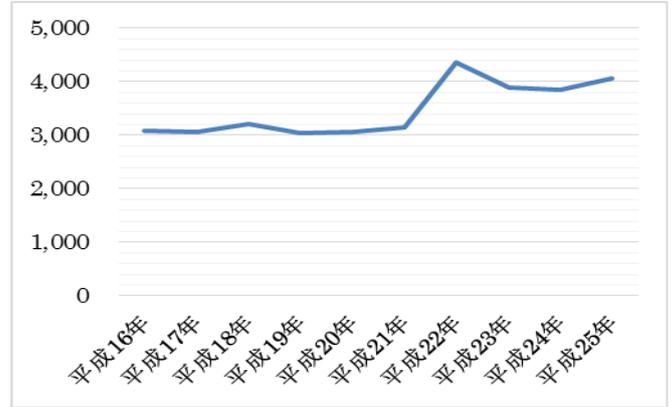
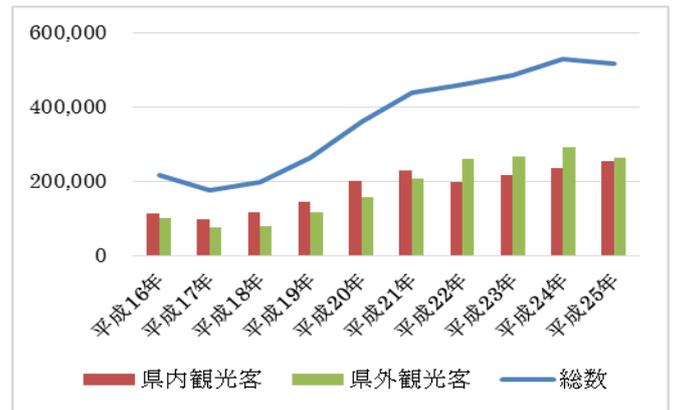


図6 室戸市観光入込客数の推移



(図5、6は室戸ジオパーク推進協議会『現況報告書』(2014)を参考に作成した。なお、原資料は室戸市商工観光深層水課資料によるものである。)

#### 5 室戸ジオパークの課題

グラフからもわかるが、ジオパークを活用した地域活性化は、短期的な効果は望むものではない。それは、徐々に観光客を増やしていくという長期的な取り組みとなる。また、自然が生んだ産物が魅力であるジオパークの性質上、人が土地を開拓し活性化を図るのは不向きだ(例 遊興施設をつくるなど)。あくまで、地道に自然を保護し、教育に役立て、経済発展を見込んでいくのがジオパークである。世界ジオパークに再認定されることだけを目標にせず、いまできることを一つずつ解決していくことが、室戸市が成功するためには必要

だと考える。室戸ジオパークが観光地として理想の形になるには、まだ時間がかかるだろう。

## 5-1 具体的な課題と解決策

### ・交通アクセスが悪い

室戸市は、車で高知市から約2時間、徳島市から約3時間、高松市から3時間半、松山市からならICを経由して3時間40分、バスなら高知市から2時間40分、鉄道なら高知駅から奈半利駅まで1時間半、さらにそこからバスを使って40分かかる。長年にわたって問題視されているが、具体的な取り組みは行われていない。室戸市にとって永遠の課題ともいえる。

### ・県外観光客の増加

2015年9月20日、21日に行われた室戸とんがり市の「青春市」というイベントに筆者も参加した。予想していたよりも多くの人々が参加していたが、その半数近くは地元民だった。図6から、県外観光客が増加傾向にあることが分かるが、室戸市の持続的発展には「県外観光客の増加」という課題は避けて通れない。解決には認知度の向上が必要だと考えるが、観光業として長い視野が必要となるジオパークにとって難しい課題だ。ユネスコによるジオパークの正式事業化によって、認知度の向上を期待する。

### ・見どころが分かりにくい

見どころがきちんと伝わっておらず、ジオサイトごとのつながりを分かりやすくする必要がある。また、室戸岬で観光客にマップを配る活動をしているが、どこに来てほしくて、なにが見どころなのかが伝わっていない。どちらも、ジオパークセンターのオープンにより改善の傾向にあるが、より一層の取り組みが必要だと考える。

### ・食べ物の充実

旅行する際に、「食べ物」を第一の目的とする人は多い。高知県庁ホームページの2011年～2014年の観光動態調査ルート分析を見ると、高知県は全国的にも「食べ物」を目的として旅行客が訪れる地域であることがわかった。したがって、食べ物の充実は、高知県にとって観光客やリピーターの増加に結びつきやすいことが予想される。

室戸市は、キンメ丼やジオパークにちなんだ商品を提供し続けている。パンフレットやホームページには、その情報を記載し、商品を提供する際は、室戸市内の飲食店が協力する

などの取り組みをしているが、認知度が少ないのが現状である。大きな成果に結び付けるには、まずこの取り組みを知ってもらう工夫が必要だと考える。

### ・経済活動の充実<sup>8</sup>

商品開発といった部分が弱い実態がある。この点に関しては、ジオツーリズムの拡充を進めながら、民間企業と一緒に考えていきたいと考えている。行政主導では持続性のある商品開発は困難である。民間企業とともに打開策も模索していく。

### ・基本計画の不備

ジオパークの最終的な目標が明確化されていない。実行計画は存在するものの、到達点が十分に議論されておらず、共有できる形になっていない。今後見直す動きがある。

## 6 まとめ

本研究では、室戸市の地域活性化を目指し、その実現に向けて必要な取り組みを考えた。ジオパークを活用した地域の活性化には、地域の特性を活かした取り組みが必要だと考えていたが、室戸世界ジオパークは、すでに独自の運営スタイルを確立しつつある。また、ジオパーク認定を契機に経済活動、住民・民間企業の活動の活性化などが見られ、室戸世界ジオパークは観光資源として十分に機能していることが分かった。

しかし、課題が多くあるのも現実である。室戸市を観光地として成功させるには、「世界ジオパーク」というブランドは必要だが、世界ジオパークの再認定だけを目標にせず、いま存在する課題を一つずつ解決し、徐々に魅力を伝えていく長い取り組みが必要だ。2016年から始まるユネスコによるジオパークの正式事業化によって、認知度の向上を期待する。

<sup>1</sup> 大橋昭一（2013）、95～97ページを参照

<sup>2</sup> 全国地質調査業協会連合会他編（2010）、8ページを参照

<sup>3</sup> 『ユネスコ、「ジオパーク」正式事業に 認知度向上を期待』日本経済新聞を参考

<sup>4</sup> 室戸ジオパーク推進協議会（2014）、10～13ページを参照

<sup>5</sup> 『高知県室戸市のジオパークセンターが入館者数5万人突破』高知新聞を参照

<sup>6</sup> 2016年2月10日の『東部博で観光客265万人』高知新聞によると、ジオパークセンターの観光客数が8万人を突破したことが明らかとなっている

<sup>7</sup> 資料には平成25年度までの数値しかないが、平成27年9月に行った室戸市の聞き取りでは、室戸ジオパークが世界認

---

定を受けてから、観光客数は約 40%増加しているとのこと  
(室戸ジオパーク推進協議会職員談)

8 室戸ジオパーク推進協議会 (2014)、15 ページ引用

## 7 参考文献

- ・ 社団法人 全国地質調査業協会連合会／特定非営利活動法人 地質情報整備・活用機構 [共編] (2010) 『ジオパーク・マネジメント入門』 オーム社
- ・ 大橋昭一 [編著] (2013) 『現代の観光とブランド』 同文館出版株式会社
- ・ 室戸ジオパーク推進協議会 『現況報告書』 (2014)
- ・ ユネスコ、「ジオパーク」正式事業に 認知度向上に期待『日本経済新聞』 2015 年 11 月 18 日
- ・ 『高知県室戸市のジオパークセンターが入館者 5 万人突破』 2015 年 8 月 30 日 高知新聞
- ・ 『東部博で観光客 265 万人』 2016 年 2 月 10 日 高知新聞

・ 室戸ジオパークビジターセンターパンフレット

以下の 5 点を参考した。

- ①室戸世界ジオパーク
  - ②室戸ジオパークスタンプラリーマップ
  - ③室戸世界ジオパークマップ
  - ④高知県総合観光パンフレット「リョーマの休日」
  - ⑤高知家 まるごと東部博「遊・食・体・感。ジオ紀行」
- ・ 室戸市ホームページ

<http://www.city.muroto.kochi.jp>

・ 室戸市 wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE>

・ 一般社団法人室戸市観光協会

<http://www.muroto-kankou.com>

・ 室戸世界ジオパーク公式サイト

[www.muroto-geo.jp/](http://www.muroto-geo.jp/)

・ 高知県庁ホームページ

[www.pref.kochi.lg.jp/](http://www.pref.kochi.lg.jp/)

・ 島原半島世界ジオパークホームページ

<http://www.unzen-geopark.jp/about>

・ 高知大学理学部災害科学 岡村土研ホームページ

<http://sc1.cc.kochi-u.ac.jp/~mako-ok/index.html>

・ 日本ジオパークネットワークホームページ

<http://www.geopark.jp/>